巻頭言

多摩森林科学園の80年を振り返って

多摩森林科学園長　　三輪雄四郎

多摩森林科学園は昨年１１月に創立８０周年を迎え，記念式典を行った。８０年といえばほぼ現在の日本人の平均寿命に当たる。８０才の方々がたどってきた道のりと同様に科学園も大きな時代の流れの中で変遷してきた。その中には今では全く考えられない研究内容，科学園の名前を有名にしたサクラ保存林の設立など忘れがちな多くの事柄が含まれている。

新聞報道によると今，歴史ある大学の中で大学創立からの歴史をたどる「自校史」を講義に取り入れているところが相次いでいるとのことである。自校の伝統や校風を紹介することで，大学自身の存在意義を見つめ直すことにも一役買っているそうである。そこで，この紙面を借りて多摩森林科学園の８０年の一部を紹介させていただく。

多摩森林科学園の発足は大正１０年宮内庁の御料林であった現在の地に，御料林の経営の合理的運営に資する試験・調査を業務とする「帝室林野管理局林業試験場」を設立したことから始まっている。発足から終戦までは種子の発芽に関する研究，森林病虫害に関する研究と並んでいわゆる林産研究が精力的に行われていたことが特筆される。各種樹種の材質試験，特にヒノキの材質に関する研究，戦時中の木製飛行機から発した強化積層材の研究などの他に，簡易ソーダパルプの製造法を発明し，木曽の支局に工場を設け実際の製造も行っている。我が国における林産研究のはしりでもある。

初めの大きな変革は昭和２２年の林政統一によって宮内省から農林省林業試験場の浅川支場へと移行したことであろう。昭和２５年の名簿によればその当時の職員数は６０人をこえ，現在のほぼ３倍の職員が働いていた。林産研究は目黒の本場へ移ったが，本場の実験林として多分野の研究を行っていた。次に多摩森林科学園を特徴づけることになったのが，昭和４１年から３年間にわたって行われた農林水産省のサクラ遺伝子保存事業であった。この事業は各地のサクラの名木や消えつつある品種を保存し，展示することを目的としていた。木が大きくなるとともに見学者も増え，現在では年間８万人を越える入場者があり，桜の名所として知られるようになっている。それに伴って，従来のサクラに関する研究を含む都市近郊林の動植物の生態・保全に関する研究とともに，一般公開のためのサクラ保存林・樹木園等の維持管理が大きな仕事となってきた。

そして，昨年の独立行政法人化に伴う組織改変の折りに，環境教育に結びつく研究を進めることとした。また都市近郊にある豊富な動植物の生育する森林という当実験林の特性を生かして，研究を通じて森林の多面的機能や価値の重要性を一般の方々に理解してもらう森に整備することとした。そのためには森林総合研究所内の研究者はもとより外部の方々の協力が不可欠であると考えている。関係者の方々の一層のご理解とご支援をお願いする。